

決断科学

域学連携特集号

座談会
1

域学連携の「牽引車」としての取り組み（対馬市）

地域とともに最後までやりぬく域学連携（長崎市）

「食」を主軸に市民を育てる域学連携（佐伯市）

肩肘を張らない、緩やかな域学連携（八女市）

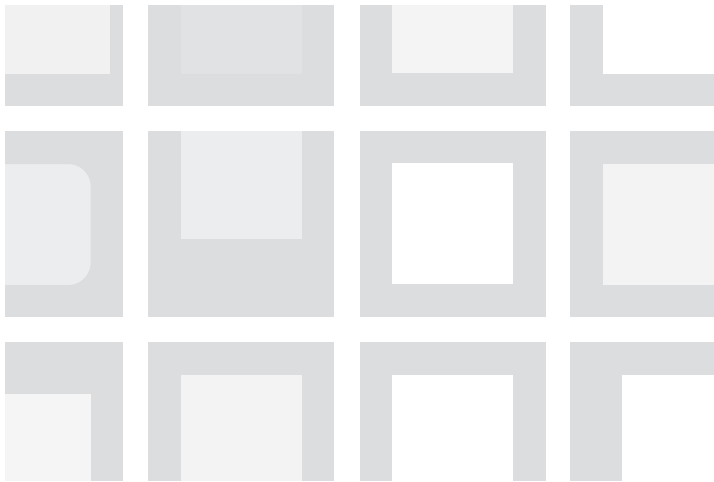
4

3

2

決断科学

域学連携特集号



九州大学
持続可能な社会のための決断科学センター

2018年3月

目次

巻頭言

矢原 徹一

4

座談会

座談会1

域学連携の「牽引車」としての取り組み（長崎県対馬市）

前田 剛 出水 薫

6

そもそも「域学連携」とは？／対馬市における域学連携／対馬市における成果と課題／「対馬モデル」の可能性／大学と自治体の関係と課題／九大との協働による成果と期待

座談会2

地域とともに最後までやりぬく域学連携（長崎県長崎市）

田上富久 向井逸平 角玲緒那 高尾忠志

32

長崎市が迎えているまちづくりの時代／長崎市で進む域学連携／長崎市景観専門監の設置経緯／景観専門監の評価／地域と専門家の相性が大事／ウイン・ウインな関係を目指す／ローカルの意味を体感しながら専門性を磨く／長崎市でのプロジェクトで学んだこと／ローカルとグローバル、知恵と知識を融合する

決断科学

域学連携特集号

二〇一八年三月三十日発行

九州大学 持続可能な社会のための決断科学センター

座談会 3

「食」を主軸に市民を育てる域学連携（大分県佐伯市）

柴田真佑 比良松道一

市民主体の食育推進計画「食のまちづくりレシビ」を作る／自分でつくる「弁当の日」と出会う
／佐伯市での食育10年の成果をふりかえる／食育の「空白世代」、高校生にアプローチする／
大学と協働しながら文化遺産を継承する

座談会 4

肩肘を張らない、緩やかな域学連携（福岡県八女市）

荒川真美 吉松慶子 徳永翔太
土中哲秀 紺屋美里 花松泰倫

八女での活動開始の経緯／八女市の現状と課題／地域から見た大学との付き合い方／学生が
地域から学ぶものとは／大学や学生が地域に与える影響とは／大学と地域を「つなぐ」人／大
学と地域のあいだで「つながる」もの／学びと地域課題解決の融合のカタチ／大学と地域の理
想的な付き合い方とは／地域の側も学生から学ぶ／今後に向けて

巻頭言

「持続可能な社会を拓く決断科学大学院プログラム」は、人文社会科学、生命科学、理工学を統合した教育によつて、専門分野の枠を超えて全体を俯瞰し社会的課題の解決に導く高度な人材を育てなさいという、文部科学省が考えたとんでもない無茶ぶりに応えるために立案された大学院博士課程5年間の教育プログラムです。このプログラムを立案するにあたり、私は徹底した現場主義で学生を育てようと考えました。大学の先生は、すぐに学生に勉強をさせたいがります。たとえば「専門分野の枠を超えて」という要請があると、自然科学の学生には社会科学を学ばせ、社会科学の学生には自然科学を学ばせると、というような学際教育のコースを立案しがちです。

しかし、そのような机の上の勉強だけでは、社会的課題の解決をリードする人材が育つはずがありません。社会的リーダーになるためには、現場の課題に継続して関わり、課題を頭だけでなく実体験を通じてしっかりと理解し、課題に関わる現場のさまざまな関係者と粘り強く対話を重ね、関係者と一緒になつてプロジェクトを動かす経験を積むことが不可欠です。そして、地域や世界の現場から学び、その学びを普遍化してはじめて、社会を変えていく博士人材が育つでしょう。この考えにもとづき、「持続可能な社会を拓く決断科学大学院プログラム」では、環境・災害・健康・統治・人間という5つのテーマについて、現場の課題解決に長期に関わり、現場の関係者の

矢原 徹一

方々と信頼関係を築きながら研究に取り組んでいらっしゃる先生方を集め、これらの先生方の現場で学ぶという教育方針を採用しました。これらの先生方がリードされているプロジェクトを「プロジェクトZ」と呼んでいます。この名称には、NHK番組プロジェクトXで取り上げられた事例のさらに先をめざし、先生方の情熱が伝染するプロジェクトにしたいという思いがこめられています。同時に、少し遊び心が入ったネーミングをすることで、楽しくやろうというねらいもありました。

この特集号では、出水薫、高尾忠志、比良松道一、花松泰倫という4人の先生方が中心になって、対馬市、長崎市、佐伯市、八女市という4つの自治体の現場で取り組まれてきた「プロジェクトZ」の経緯や成果を、対談形式でまとめました。対談をお読みいただければわかるように、4人の先生方の情熱と、地域のリーダーの方々の情熱がつながり、そこに学生が関わることでさらなる化学反応が生まれ、すばらしい学びの場が生まれました。学生たちは、継続的に地域に関わり、地域の方々と一緒にプロジェクトに取り組む中で、リーダーのビジョン、

情熱、実行力の大切さを、身を持って学んでいます。5年前にこんなプログラムができたらと思いい描いた夢が、現実になって進行していることに、胸が熱くなる思いです。

プログラムが本格的にスタートしてから4年あまりが経過し、学生が取り組んだプロジェクトの成果が形になるケースも生まれてきました。自治体がかかえるさまざまな課題は、少子高齢化に代表される構造的な問題とながっているので、その解決は容易ではありません。しかし、教員も学生も自治体関係者も、一連のプロジェクトでの協働経験を通じて、地域の未来に明るい希望と確かな手ごたえを感じています。もちろんさまざまな課題もあります。この対談で語られている到達点と課題を共有することで、さらに次のステージに進んでいけるでしょう。これからも各自治体の関係者の方々との対等な協働を発展させ、地域の課題解決に少しでも貢献するとともに、次の時代をなう地に足のついた人材養成にとめたいと思います。

(九州大学教授・決断科学センター長)